

中世出土漆器の製作技法

奥原 加奈子

序章 はじめに

本修士論文は、中世出土漆器の製作技法についての研究である。本修士論文では考古学的手法も取り入れつつ、自然化学的手法によって奈良県内の奈良盆地、いわゆる大和地方の中世出土漆器を研究していくこととした。すなわち中世遺跡出土漆器の集成、器形観察や形態の分類、編年の試みである。また自然科学的手法の最も基本である、塗膜断片のプレパラートを製作および観察し、塗装構成や加飾方法の調査を行った。

第1章 考古学的研究

(1) 奈良県における中世出土漆器変遷

ここでは、奈良県における中世出土漆器の変遷を追ってみた。中でも12世紀以降のものを中世漆器とみなし、編年を試みた。編年では出土量や形態などからその時期を2つに分けⅠ・Ⅱ期とした。Ⅰは12世紀から14世紀である。この時期は漆器が出土し始める時期である。高台については高台を明確に削り出す輪高台が多いが、数は少ないけれども高台を明確に削り出さない総高台や高台を全く削り出さない平高台のものも見られる。碗というよりは鉢の器形に近い。器壁は薄く一定である。塗の形態は総黒色のものが多いが、14世紀に入ると内赤外黒のものも現れるようになる。碗皿類では総赤色のものはないことになる。漆絵は大きく絵画的で、内外面ともに施されるものが多い。Ⅱ期は15世紀以降である。口径に対して器高が大きくなり、器壁は口縁部を薄く底部を厚くする。塗りの形態は、14世紀頃から内赤外黒のものが現

れるようになったが出土量はごく限られており、出上量が増加するのは16世紀後半以降である。また同じく16世紀後半以降、数は内赤外黒に比べれば少ないものの総赤色の出上も増加する。ここで古いタイプの漆器が消え、新しいタイプの漆器へと移り変わった17世紀後半以降の時期を区切る。以上のことから、中世漆器の範囲は12世紀から17世紀前半と結論付けるものである。

(2) 本修士論文で取り扱う遺跡の概要

- ①越智遺跡（試料番号88～101）…奈良県高市郡高取町越智に所在
 - ②小山戸城跡（試料番号43～44）…山辺郡都祁村大字小山戸に所在
 - ③平城京東市推定地 第17次調査（試料番号102）…奈良市杏町字東ノ口581-1に所在
 - ④平城京左京八条二坊三坪第362次調査（試料番号103）…奈良市杏町427-1に所在
 - ⑤平城京左京三条四坊十三坪第413次調査…奈良市大宮町二丁目98-7に所在
- 各遺跡についての概説。

第2章 自然科学的研究

自然科学的研究今回行った実験については、A. 光学顕微鏡観察とB. 蛍光X線分析の2通りである。

(1) 実験手順

A：サンプリングした試料をエポキシ樹脂で包埋し、研磨してプレパラートを作成した。それを顕微鏡観察することにより、漆器試料の塗装構成の断面を観察できる。透過光顕微鏡、偏光顕微鏡、反射顕微鏡を併用すると以下のようなことが観察できる。塗装回数・塗装の色・漆絵や蒔絵などの加飾技法・赤色顔料の有無などである。

B：出土漆器に使用される赤色顔料は主に水銀朱（HgS）とベンガラ（ Fe_2O_3 ）の2種類である。赤色顔料の元素分析を行い、HgやSの反応が検出されれば水銀朱、Feの反応が検出されればベンガラであると判断した。

使用した分析機器、および条件は以下のとおりである。

使用機器：エネルギー分散型蛍光X線分析器

（エダックス・ジャパン製、イーグル号）

加速電圧：15keV

照射電流：650mA

測定時間：200秒

クロム管球

(2) 顕微鏡観察結果

顕微鏡観察結果を記す。

(3) 出土漆器の復元的製作

出土漆器の復元的製作として、手板試料を製作した。手板製作の目的は、その塗膜構造、ひいては製作手順の検証及び確認である。今回製作した手板はA、堅地、B、炭粉渋下地、C、炭粉漆下地、D、生漆の4種類である。

これら手板の塗膜構造から、まず漆の種類について述べると、クロメ漆は黄色から淡褐色を呈することが分かる。出土漆器と手板の塗膜構造を比較してみてもすぐ分かる、一番大きい違いはDの漆層が極端に薄いことである。出土品は漆を厚く塗っているようである。Aは最後の仕上げとして黒漆をかけるが、103は下地のすぐ上に黒漆をかけ、その後漆を塗り重ねている。このような塗膜構造は平安時代前期の出土漆器にもみられ、古代から中世に至るまでこちらの方が一般的であったようである。また出土漆器は炭粉下地の木地への浸透が顕著に見られることから、木地固めは行わずに、木地に直接下地を施したと推測される。

(4) 考察

以下、顕微鏡観察及び蛍光X線分析で得られた結果を各項目について整理する。

- ① 下地…今回扱った試料の中では、①炭粉渋下地、②炭粉漆下地、③サビ地の3種類の下地が見られた。このことは渋下地の漆器の普及が14世紀の大和地方においても進んでいたことを裏付ける。
- ② 塗…塗は下地層の上の漆層をさすが、越智遺跡出土漆器に関しては2、3点の特殊なものを除いてはグループ化が可能である。次にグループ2として89・94・99に見られるやや厚めの炭粉下地を持ちその上に褐色の漆を1層重ねるもの。そしてグループ3つ目が95・96・101に見られるやや厚めの炭粉下地を持ちその上に褐色の漆を2層重ねるものである。漆の種類としては、グループ1に見られるような黄色から淡褐色を呈する漆と、グループ2、3に見られるような褐色を呈する漆の2種類がある。これらは手板のプレパラートとの比較により、黄色から淡褐色を呈する漆はクロメ漆、褐色の漆は生漆とそれぞれ比定できるものと思われる。
- ③ 赤色顔料…赤色顔料の種類を特定するために、試料番号44・88・90・91・92・93・97・99・10・102の10点について蛍光X線分析を行った。その結果、小山戸城跡出土の44からはFeの反応が検出されたことからベンガラ (Fe_2O_3)、それ以外の試料からはHgとSの反応が検出されたことから水銀朱 (HgS) と判断した。
- ④ 形態…総黒色や内赤外黒といった塗の形態については、確認されたのは総黒色、内赤外黒、総赤色の3種類である。越智遺跡では塗の形態がはっきりと分かるものについて述べると、総黒色が8点に対し内赤外黒（と思われるものを含め）椀が4点となる。

まとめ

最後にこれまで見てきた大和地方の中世出土漆器について、概要をまとめる。

- ① 編年… 1章で述べた中世出土漆器の編年であるが、大和地方出土の中世漆器は12～13世紀ごろから現れ始め、14世紀に入って出土量が増加する。瓦器碗が衰退する時期に漆器の量が増加することから、食膳具の中で瓦器碗が占めていた役割が漆器に移っていく可能性がある。また16世紀に総黒色の漆器の出土量が減少するのは、今度は漆器が他の食器にその位置を取って代わられたと推測することもできる。中世に日常食器であった総黒色の漆器は新たに現れた食器にその座を明けわたし、代わって「特別な場合のための食器」である内赤外黒・総赤色の漆器へと漆器業界はその主要製品をシフトする。
- ② 漆器の等級—普及品と上級品—

漆器製作技法は、その漆器を使用した個人の身分や経済状態が、より強く反映される。下地の材料は上級品には漆下地、普及品には代用下地が使われ、赤色顔料は中世にはみられなかった水銀朱とベンガラを使い分けが器種や器形、塗の形態の多様化が進む中世後期の16世紀後半ころに確立されるものと思われる。その他、上級品は蒔絵・螺細・布着せなどが行われ、普及品は無地もしくは漆絵が行われる。

おわりに

残された課題などを述べる。